
天才少女のインヴェント

白神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天才少女のインヴェント

【Nコード】

N3306BA

【作者名】

白神

【あらすじ】

稀代の天才少女・有明愉利は据え置き型のゲーム機で偶然、タイムマシンを発明する。愉利はタイムマシンの実験を行うため幼馴染みの歳宮遥吉を犠牲にして、遥吉を2050年にタイムトラベルさせた。だが、移動した世界はゲームの世界、つまり、発明したのはタイムマシンではなく、ゲームの中に入る機械だった。遥吉達はどうやって、元の世界に戻るのか？必見だね

プロローグ 偶然の産物（前書き）

読者様の暇潰しになれば幸いです。

プロローグ 偶然の産物

ある日、日本の東京のとある町のとある建物である少女が稀代の発明をした。それは偶然に生まれた物で誰もが失敗したと言っだろう。それが普通の反応に違いない。だが少女はそうは思わなかった。確実に成功している自信が少女にはあった。そこで実験をすることにした。科学者はいつでも実験で功績を、名を、世に刻みつけた。実験が成功すれば皆が認めてくれて世に出せるはずだと少女は思った。そして、少女は幼馴染みを実験対象に決定した。幼馴染みを実験対象にすることには、躊躇いも少女の中にはあるが今回は迷っている暇はない。そして、少女は部屋の中を歩く。そしてカーテンを開けて、窓を開け放つ。外は真っ暗で月が出ていた。夜風が吹いていて少し肌寒い。少女は向かいに位置する家の窓を直視する。緑のカーテンが閉まっていて、中の状況を窺うことは透視能力がない限り、不可能だ。少女は窓を跨り、屋根に着地して、向かいの窓に移る。少女の身のこなしは手慣れたもので、何度もその行為をしていたような感じだ。少女は拳を作り、窓を叩いた。

午前3時、深夜に歳宮遥吉は窓を叩く音としまやはるよし

で目を覚ました。「なんだよ？こんな遅くに」遥吉は体を起こしてまだ重たい瞼を起こす。窓の横にベッドを設置しているため、わざわざ立たなくても窓を確認することはできる。カーテンが閉まっていて、窓を叩いている人物の影が映っている。「あいつか…」遥吉はそう呟いて、カーテンを開けた。

窓の向こうには、水色の髪の毛を生やして、二重瞼のくつきりとした顔立ちをして、眼鏡をかけた少女が立っている。少女は「開けて」と言っているが遥吉は聞こえない振りをする。少女は、一瞬だけ遥吉を睨む。すると、右を見て、「あいつが来た！殺される！」と言って、ターミネーターの登場のシーンのサウンドを窓を叩く音で表

現する。「何やってんだ？はあ、開けるか」これ以上窓を叩かれたら、近所迷惑だし、家族が起きてしまう。遙吉は、仕方なく、窓の鍵を解いて、窓を開ける。「何しに来た？愉利」と遙吉は少女の名を言う。少女の名は有明愉利、遙吉の幼馴染みであり、隣の家に住んでいる。愉利は科学者になるのが小さい頃の夢であり、よく家で発明したり、実験したりしている。遙吉も実験に付き合わされて、良い目にあつたことは少ない。だが、愉利はもう世界的な科学者になったも同然なのだ。なぜなら、中学生の頃に、愉利は真空の中でも、酸素ボンベ無しで呼吸が可能になる装置を創り出したからだ。仕組みは電磁波を利用した奴でそこまでしか理解出来ない。まあ、愉利にとってそれが初めての発明品だった。遙吉はその実験に付き合い、何回か死にそうになったことがある。つまり、宇宙空間でも生身で行動できるという常識を逸脱した発明をした。そして、愉利は世界レベルでマスメディアに取り上げられる。インタビュー中に愉利は、遙吉が実験を手伝ってくれたことを言った。そして、「遙吉は私の許嫁です」とも発言した。その後、遙吉の家にもテレビの人達が来たのは、当然の結果だ。そういう、破天荒な性格をした愉利が遙吉の部屋に来たのは、ある目的があるからだ。遙吉は「また、実験か？もう嫌だぜ」と初めに断りを入れる。だが、愉利は「まあ、まあそう言わずにね」と窓を縁を乗り越えて、部屋に入ってくる。愉利は当然のようにベッドに横になりだした。「うん、まだお爺さんの匂いはしてないね。安心、安心」と枕に顔を埋めて、言う。「おい、何、奇行に走ってんだ。お前は」遙吉は愉利の襟を持ち上げ、枕から離す。愉利は常時、白衣を着ているイメージがあるが、今はピンクのパジャマを着ている。愉利は遙吉に持ち上げられながら、「結婚するんだから、いろいろ偵察しとかなきゃ」とずり落ちた眼鏡を元の位置に戻す。知的さアピールしてるのか知らないが全く、俺には効果がない。「また、そんなことを、照れてるんでしょ？」と愉利は遙吉の首に手を回して、至近距離に顔を近付けて、言ってくる。呼吸する音が身近に感じるくらいのプライベートゾーンを完全

に無視した近さだが遙吉は動揺していない。というか、表情筋を一切動かしていない。この状況で理性を保って居られるのは達人技だ。「で、次は何を発明したんだ？愉利」遙吉は愉利に質問する。愉利が遙吉の部屋に来るのは、大概、実験の手伝いということとは相場が決まっている。それは、長年の経験を統計した結果だ。愉利は遙吉から離れ、手で顎を触りながら、「うーん、手伝ってくれるなら言うてあげる」と言うてきたので遙吉は「じゃあ、いいや。早く帰れ」と言い放った。確かにどんな発明をしたのか知りたいという好奇心はあるが、俺の身を守るためだ。

愉利は、こんなことを言われて素直に帰る奴じゃない。それは、実験の犠牲者である遙吉が一番認識している。そして、案の定、愉利は「遙吉、お願い、一生のお願い！」

と遙吉に抱きついてきた。後ろから、つまり、背中に抱きついてきたので離れるのは困難だ。それに、愉利の胸が完全に当たっている。意外に豊満だと変態的な意識してしまった遙吉は狼狽してしまう。

「ちよつと、離れる！胸が当たってる」と遙吉は愉利に忠告するが愉利は「わざと当ててるの」と平然と応える。愉利は、このように平気で大胆な行動をしてくる少女だ。本人には恥ずかしいという感情がないのか？と思ってしまう。すると、愉利は自分の両手を遙吉の服の中に入れてきた。遙吉はどうしていいのか分からず、抵抗することに意識を持っていけなかった。愉利は遙吉の横腹を掴む。「お前、待て！！」遙吉は愉利が何をするのか理解した。そして、止めようと愉利の腕を掴もうとした直後、愉利の指に素早く動き出した。「こしょこしょ」と愉利が乱雑に指を動かす。「ちよつ、やめ、あつはははははは！」「遙吉はこしょこしょが苦手だからね、まあ手伝うって言うなら止めてあげるけど？」愉利は指の動きを止めずに勝ち誇った顔で聞いてくる。「分かった！手伝う、あつははははは！！」「え、聞こえないなあ？」「手伝う！！手伝わしてください！！」「遙吉はこしょこしょから逃れるために叫ぶ。愉利は遙吉から手を話して、立ち上がる。遙吉は、ベッドの上でぐったりして

いる。愉利は窓に手をかけて、「じゃあ、私の部屋に来てね、発明品を見せてあげる」と遥吉の部屋を出て行く。遥吉も落ち着いてから部屋を後にする。愉利の窓は開いていて、部屋の奥で手招きしている。遥吉は愉利の部屋に入り、茶色のテーブルの横にいる愉利の元に歩み寄る。部屋の様相は、高校生の女の子らしい家具や机が並んでいる。ぬいぐるみがベッドの上に並んでおり、あまり寝ていないことが分かる。ふと、遥吉はテーブルの上に置いてある据え置き型のゲーム機に視線が移る。遥吉はゲーム機を見ながら、「これが発明品か？ 案外、何も無さそうなんだが」と遥吉は言う。愉利はコントローラを手取る。「これは、いろいろいじくってたら、偶然、出来た発明品、タイムマシン！」愉利は眼鏡のフレームを持ちながら言う。愉利はいつも、重要なことを宣言する時は、特に意味の無いポーズを取る。本人は、威厳あるポーズだと自負しているらしいが俺から見れば、唯の厨二行為だ。遥吉は、愉利が言ったある単語に強い関心を抱く。「タイムマシンって、それ真剣に言ってるのか？ タイムマシンは時間を自由自在に移動出来る機械だぞ」と遥吉は言う。だが愉利は右手の人差し指を立てる。「遥吉は知らないかもしれないけど、タイムマシンもどきはもう、完成してる。現在、造られてるタイムマシンは未来にも、過去にも行けるけど、元の時代に帰ることはできない。なぜなら、元の時代に帰るには未来や過去に行った時の二倍のエネルギーが必要になる。未来や過去に行くのに半分かくらいの燃料を消費するのに戻る際に二倍のエネルギーをおうとすれば燃料オーバーになっちゃうからね。」愉利は饒舌になつて、話す。遥吉はタイムマシンがもう出来ているなんて初めて知った。タイムマシンは人類の最大の命題だ。今まで、あらゆる科学者達がタイムトラベルについて研究したが、重力の問題や質量保存の法則により、物質を時間移動させることは物理的に不可能とされた。だが、愉利はそれを発明させたとおっしゃる。遥吉もタイムマシンと聞いて、俄然、やる気が漲る。「それで、俺は、何をするんだ？」と遥吉は聞く。愉利はゲーム機の電源をつける。機動音が静

かに鳴る。愉利はディスプレイに目を移す。遥吉もディスプレイを見る。すると、ディスプレイに年月と時刻が書かれていた。ノイズのようなものが画面を覆っていて、不気味だ。愉利はコントローラを操作して、年月と時刻を打ち出す。コントローラを動かす音が複雑に鳴っている。そして、愉利は顔をディスプレイから反らして、遥吉の方に向ける。ディスプレイには2050年、4月5日、8時00分と出ている。「遥吉には、この時代に移動してもらおうね」「2050年に本当に移動出来るのか？それに戻れる保証はあんだろうな？」と遥吉は愉利に聞く。だが、愉利は、遥吉の不安を煽るように「分かんないから実験するんじゃない、だから、早く準備してよ」と言う。こんな適当な判断で俺を未来に送るつもりだったのか？軽率にも程がある。だが、まあ、ここは、愉利を信じてみるか。「分かりました」と遥吉は自分の部屋に戻り、私服に着替える。何かあったら、ということでききやすい服に着替えて、愉利の部屋に戻る。

「準備万端だ。いつでもどうぞ」と遥吉は言う。愉利はそれに頷いてから、右手の指を二本立てる。「二つ言って置くけど、まず、未来の自分に会ったら駄目よ。それに未来の人達との接種も避けてね、そして、未来に行つて、20分経つたら、元の時代に強制帰還するから覚えておいてね」と愉利が説明する。今回の実験では、未来に移動して、ちゃんと元の時代に戻れるのかということを確認する。遥吉は内心期待感と不安感で一杯だが、数少ない幼馴染みの頼みだ。ここは、男である俺がやるしかないと思気込む。遥吉は深呼吸して、心を落ち着かせてから「やってくれ」と言った。愉利はコントローラを操作して、開始確認画面に移行する。画面には、遥吉が移動する時間、2050年、4月5日、8時00分が書かれている。そして、画面の一番下に「開始」と書かれたタグがあり、愉利はカーソルをその上に置く。愉利も緊張しているのだろう。コントローラを持つ腕が震えていた。「行くよ」と愉利が言う。遥吉は何も考えずに静かに目を閉じる。そして、ボタンを押す音が聞こえた。その時、

愉利が「生きて帰って」と確かに言ったのを覚えている。

最初に遙吉を襲ったのは、激しい耳鳴りだった。その後、吐き気、頭痛、浮遊感が押し寄せて来る。目を開けることもできない。遙吉はそれに堪えるしかなかった。だが、それもおよそ20秒で終了する。長い時間このままだと思ったがそれでもなかった。浮遊感も消えて地面に立つ感覚が生まれる。そして、遙吉は目を開ける。最初は眩しくて、前がよく見えなかったが、光に慣れて、視界が良好になる。そして、遙吉が最初に目にしたのは最悪の光景だった。「取り敢えず、成功ということで」と遙吉は言う。すると、「あなたは誰ですか？もしかして侵入者？」と学生服のようなものを着た総勢20人の女子がいた。全員、遙吉を睨んでいる。遙吉は「えーっと、ここ、どこですか？あと、できれば今西暦何年ですか？」と女子生徒の一人に聞く。女子生徒は何を言っただんだ？こいつ、みたいな顔して「今は西暦2050年、そして、ここは東京のSSJ、日本中から優秀な能力者が集う国立高校です」と言った。今の言葉でタイムトラベルは成功したと遙吉は確信する。そして、やはり未来に来たということを実感した。周りには見たことのない機械が立ち並んでいる。

遙吉は、無事未来に移動する事ができた。だが、2050年の世界は計り知れない変貌を遂げていた。

厨二が集まる世界

確かにタイムトラベルは成功したらしい。

愉利の奴、とんでもないものを創りだしやがった。

もしかしたら、ノーベル賞とウルフ賞を同時授与されるんじゃないか？

「もう一度、聞く。お前は、一体誰だ？襲撃者か？」と紺色の髪をした少しつり目の女子が遥吉に訊く。

周りの女子も真剣な面持ちになり、警戒する。

俺は、どんだけ警戒されるんだ。ただの高校生である俺に今の状況を打破する能力なんて持ち合わせていない。というか、不安で仕方ないんだよ。

1人で高校の入試を受けに行く時のいい知れぬ不安感と一緒にだ。

9

「何か、特殊な能力を使うかもしれん。注意しろ」

えっと、今なんて？

すごい厨二的発言が聞こえたんだけど、ツッコんでいいの？

はいはい、厨二乙って言っちゃうよ。

「俺、能力なんてないんですけど、あ、でも本当に能力があるとするれば、すべての幻想を打ち壊す能力がいいな」と遥吉が言う。周りの女子達全員にどよめきが走る。

皆、口々に「能力がないなんてあり得ない」と言っている。

あれ？俺、変な言ったか？能力があります。と言った方が良かったかな。

でも、俺は、アニメは好きだが、二次元と三次元の区別はできる

からそういつ言動は慎んでいるんだ。

「冗談を言うな！人間は、必ず能力を持っているはずだ！」とつり目が言う。

「という夢を見てたんだね。分かるよ、俺にもそんな時期があった。俺には、能力があるんじゃないかと。だがな、現実には、常に俺達を苦しめる。辛い時だってある。それでも、俺達の世界は、現実しかないんだ！目を覚ませ！」と遥吉が言った。

「そんな、話をしてるんじゃない！お前、私をおちよくってるな？」俺に口喧嘩で勝てるわけがない。そうだ、景気づけに俺のことをお兄ちゃんとして…」

「侵入者をいや、変態を確保しろ！」という言葉で周りにいた女子が全員殴りかかってきた。その顔は、鬼の形相であり、修羅を連想する。

「俺は、変態…紳士だ」と遥吉は、気絶する前に言った。

そこは、尋問室。

よく、刑事ドラマで出てくるような部屋だ。窓はなく、防音加工された壁で部屋の中は、静寂に包まれていた。そして、椅子に遥吉は座っていた。目が覚めると、この部屋にいた。

自動で横にスライドして、ドアが開く。

遥吉は反応して、ドアを見る。

「よお、目が覚めたみたいだな」と男が言う。

男の外見は、軍人のような服を着ていて、いかつい顔をしている。体も大きい。その後ろに、あいつり目が入ってきた。

つり目は、遥吉を見るなり、舌打ちをして、部屋の隅に移動する。男は、遥吉の向かいの席に座る。

「俺は、れんじょう 纏条空銅だ。そして、その隅にいるのが」と纏条が親指で部屋の隅を指す。

「くもとり 雲取瑠奈よ、変態」と瑠奈が言う。

「俺は、変態じゃない！変態紳士だ！間違えるな！」と遥吉は、弁解する。

「変態は、否定しないのね」と瑠奈が言った。

遥吉は、この時、違和感を感じた。今、名乗った2人の名前をどこかで聞いたことがあったからだ。

気のせいとかではない。

確実に、遥吉の記憶に残っている感覚だ。

だが、遥吉は、この時は、まだ気付いていなかった。その感覚が、この世界が本当は、何であるかが分かる証明だったことに。

「さて、まず君の名前は？」と纏条が質問してくる。纏条は、いかつい顔をしているが、口調や佇まいは、きちんとしている。

まあ、人を見かけで判断したら駄目だな

「歳宮遥吉です」と遥吉が答える。

「歳宮君、君は、なぜここに来たのかな？襲撃するためかい？」と纏条が訊く。どうする？過去から来ました！てへっ。って言うか？いや、言ったら、殺されるな。俺の長年の勘がそう告げている。

苦手な数学のテストが悪くて、一回赤点を探った時に先生に呼ばれて、先生が『なんだ？この点数は！』と言った口調に似ている。

俺は、『思っただんですが、関数とか確率って社会に出て、役に立ってますか？俺は、役に立たないと思います』と言った。放課後、先生に祭り上げられた。

つまり、ふざけたことを言ったら、俺の首は、飛ぶ。ここで失敗は許されない。納得がいくことを、なおかつ、法律に触れないようなことを言わなければ。

「駅前のロフトに行こうとしたら、ここに着いちゃったみたいなの」と遥吉が言った。

直後、机が粉々に壊れた。縄条が拳で砕いたのだ。

「舐めてると、この机みたいにお前も粉々になるぞ」と縄条が言う。「えっと、その、あの、す、すみませんでした！調子に乗る気はなかったんです！」と遥吉は、土下座して謝る。多分、今世紀最大の土下座だ。プレデターに土下座するくらいの暴挙だ。

「なぜ、ここに来た？誰の命令で生徒達を攫いに来た？吐け！吐かないとバラすぞ」と縄条は、遥吉の首を掴んで、持ち上げながら、言う。

遥吉は、簡単に持ち上げられて、頭が天井に着くくらいの高さになる。

「あつかはっ」

遥吉が苦しみます。

縄条の握力は、凄まじい。岩でも壊せるくらいの握力はあるだろう。

遥吉の意識がいよいよ、消え失せようとした時、

「やめなさい！縄条！その子が本当に生徒達を攫うグループの使いで来たとは思えない！」と瑠奈が止めに入ってきた。

縄条は、悔しそうな表情を浮かべる。

そして、遥吉から手を離す。

遥吉は、床に落ちる。

「おえっ、ごほっ」

「悪かったな。俺としたことが冷静さを失っていた。」と縄条は遥吉に謝罪する。

「俺も…ロフトなんて言ってますみません」と遥吉も謝る。

ヤバかった。危うく、死にそうだった。こんなに怒ると思わなかった。

「お前、能力を持っていないらしいな」と唐突に纏条は訊く。能力つてのはなんなんだ？この学校は、スローガンが皆、自らに設定を背負えとか言ってるんじゃないのか？もしくは、校長が廃人と化しているのかな。まあ、俺には、能力なんてないしな。

「ありません。俺は、そういう星の下で生まれましたから」と遥吉は言う。

「そうか、珍しい奴も居たもんだ」と纏条は言う。

纏条は、「机の修理を事務にいわなきゃな」と言ってるドアに向かう。すると、振り返り、

「お前、もう帰っていいぞ。じゃあな」と言ってる纏条は尋問室を後にする。

遥吉と瑠奈が残された。気まずい空気が流れた

「校門まで案内するから、ついてきなさい」と瑠奈が言う。

遥吉達は、尋問室から出る。

そして、廊下を歩く。

「ごめんなさいね、さっきは、怖かった？」と瑠奈が言う。

「まあ、死にそうにはなったが、生徒達を攫うってどういうことだ？」と遥吉は訊く。

「今、世間で高校生を誘拐する事件が多発してる。それは私達の学校でも、攫われてる。纏条は、風紀委員長として、生徒達を守らなければならぬと思ってる。でも、犯人の目星はつかなくて、焦ってるんだ」と瑠奈は言う。

「物騒な世の中だな」

と遥吉は言う。

未来でも、誘拐なんてする奴がいるんだな。まあ、人間がいる限り、その連鎖は、終わらないしな。

すると、瑠奈は、不意に腕時計を確認する。

「もう、11時半か。時間経つの早いわね」と瑠奈が言う。

「11時半？嘘だろ?!見せてくれ」と遥吉は瑠奈の腕を強引に掴んで、腕時計を見る。

「ちよつと、痛いな!優しくなさいよ」と瑠奈が怒っているが、気にしてられない。

確か、未来に行ってから、20分で元の時代に戻ると愉利が言っていたはずだ。

だが、今は、20分どころか、3時間半も経ってる。

実験の内容は、未来に行つて、元の時代に戻ることだ。

つまり、実験は、失敗したことになる。そして、俺は、もう二度と、戻ることはいないんじゃない?

嘘だろ?泣きそうなんだけど、ヤバイ、どうするんだ?俺は、一体...
その時、声が聞こえた。

「遥吉ー、遥吉ー」

声が近づいてくる。

聞き覚えのある声。

俺の幼馴染みの声。

俺は、後ろを振り返る。

「遥吉!良かった!」

愉利がいた。

なぜ、この時代にいるのか分からない。

でも、俺にとっては、天使に見えた。

愉利は、俺の胸に飛び込んできた。温かい。

こんなに愉利で安心感を抱いたことはない。

「ごめん、やっぱり失敗しちゃってたみたい…」と愉利は俯いて言う。

愉利は、俺の服を強く掴んだ。

「怒ってる、よね？」と愉利は俯きながら言う。

愉利は、俯いたまま動かない。だから俺は言った。

「別に怒ってない。だから俺の顔を見てくれ」

愉利は、俺の顔を見上げる。だが、視線を泳がして、俺の顔を見ない。

「俺は、お前の笑顔が大好きなんだ。だからお前は、いつでも、笑っていてくれ」と俺は言う。

なんつう、恥ずかしいこと言ってるんだ俺は。

これじゃ、まるでプロポーズじゃないか。

そして、案の定、

「遙吉！私と結婚するの？やったー！大好き！！」

と愉利が抱きついてくる。やっちまったな。

「私は、お邪魔みたいだし、もう行くわね。お幸せに」と瑠奈は、笑いながら、去っていった。

あれ？案内するとか言ってたじゃん！どこで空気よんだよ！！
「遙吉！キスしよ、誓いのキ・ス」と背伸びして、顔を近づけてくる。

こいつ、俺の腕を握って、動けないようにしてやがる。策士だ。

俺は、顔を背ける。

「あ！キスしてくれたら、この世界が本当は、ゲームの世界ってことを教えてあげようと思ったのになあ」と愉利は言う。

「お前！ゲームの世界ってなんだよ！！ここは、未来の世界じゃないのか！？」と俺は愉利の肩を掴んで訊く。「えっ、あう、そうよ、私も調べて分かったの。だから、遙吉に言うためにこの世界に来たの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3306ba/>

天才少女のインヴェント

2012年1月11日02時49分発行